

【書評】酒井健『バタイユ』 青土社 二〇〇九年 「非 - 知の夜」への誘惑—酒井健著『バタイユ』を読む

齋藤, 元紀 / Saito, Motoki

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政哲学 / 法政哲学

(巻 / Volume)

7

(開始ページ / Start Page)

51

(終了ページ / End Page)

54

(発行年 / Year)

2011-06

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007937>

【書評】

酒井健『バタイユ』青土社 二〇〇九年

「非―知の夜」への誘惑——酒井健著『バタイユ』を読む

齋藤 元紀

バタイユは、現代の思想家のなかでも、きわめて扱いの難しい人物である。というのも彼は、性や暴力をはじめとする反理性的で醜悪なテーマを好んで取り上げ、それらをしばしば意図的に論理を欠いた文体によって描き出したからである。しかし同時にバタイユは、同じ理由から、現代においてなお人の関心を惹きつけてやまない思想家の一人でもある。というのも彼は、伝統的な西洋哲学が忌避した性や暴力といったテーマをあえて正面切って取り上げ、整合的な論理の崩壊を厭わず、生の体験の深層へと果敢に突き進んだからである。いずれにせよ、バタイユは、われわれの思考を刺激せずにはおかない人物と言つてよい。

これまでに酒井氏は、バタイユに坎する数々の書物のいずれにおいても、一方的な賞賛にも単純な批判にも陥ることなく、バタイユの刺激的な思想の核心を的確に描き出

してきた。激しくうねりながらも軽やかさを湛えたバタイユの思考を、絶妙なバランス感覚をもって取りまとめてゆく氏の見事な手さばきは、本書『バタイユ』においても遺憾なく発揮されている。しかし、わけても本書において注目すべきは、バタイユの生の思想を徹底的に掘り下げた一方、その思想を広く西洋の文化の流れのなかに位置づけた点だろう。バタイユの思想をこのような『生の文化史』において読み解く点に、類書と一線を画す本書の最大の特徴がある。

本書は、「夜」、「グノーシス」、「非―知」、「死」、「中世」という五つの章によって構成されている。各章は初出論文の年代順ではなく、緩やかな内容のつながりにそつて配列されており、読者は、生の文化史のうちに立つバタイユの多様な表情を眺めながら、おのずと彼の思想の最

深部へと誘われてゆく仕掛けである。

第一章は、若き酒井氏自身がバタイユ読解にあたって讀いた「夜」の含意についての回想から始まる。謎めいた「夜のなかの生」をめぐる氏の考察は、中世キリスト教を經由したうえで、フロイトやセリーヌを手がかりに、第一次大戦やナチス・ドイツといった《夜の時代》におけるバタイユの「生」の経験を浮かび上がらせてゆく。敵と味方の区別もつかない戦時下の暗闇を辛くも生き抜いたバタイユにとって、「夜の感覚」は「出口の見あたらない絶望感」と「表裏一体」であり、徹底的に言語化を拒むものであった。しかしバタイユは、そうした夜の苦悩の只中であって、なお「地上の生きとし生ける人すべての生に心底魅せられて交わりを欲し、そうして生き続けた」（一八頁）。ここで氏は、「殺意」と背中あわせの「愛欲」としての「友愛」というバタイユの発想が、ロマネスク様式の教会堂の地下聖堂に漂う民衆の力強い生命感に連なるものであることを、見事に指摘してみせる。

第二章は、中世からさらに歴史を遡り、バタイユと「グノーシス」との関係に焦点をあてている。バタイユとグノーシスとの関係は、これまで議論の俎上に載せられることはあっても、考察の主題として取り上げられることはなかった。その点で本章は、国内外を問わず、バタイユ研究において前例のない画期的な試みである。バタイユは「低い

唯物論とグノーシス」において、定説とは異なり、グノーシス派を物質界ないしは唯物論重視の立場として捉えた。氏は、このようなバタイユの異説の内容と動機を、グノーシス研究史とバタイユの思想的発展の双方を踏まえつつ、図像解釈をも織り交ぜながら明快に解き明かしてゆく。バタイユは、非キリスト教系のグノーシスですら、物質界と精神界の両側面に跨る矛盾を内包していることを承知しつつも、近代人への批判を込めて、物質界の根底に横たわる非理性的な生の力の側へと、あえてグノーシス理解の舵を切った。グノーシスとバタイユの思想とその同時代の背景を巧みに結び合わせた、氏の洞察冴えわたる一章である。

第三章では、バタイユの「非知」の思想の成立と展開の軌跡がきわめて鮮やかに描き出されている。バタイユの「非知」の思想は、「逆説的な哲学」の構想に始まる。この哲学は、これまで知が愛してこなかったもの、すなわち「不可知のもの」を、たとえ不十分にしか知ることができないとしても、無視したり、都合よく歪めたりして「憎悪する」のではなく、「愛する」ことをめざす。この構想は、キリスト教の瞑想体験を乗り越え、またベルクソンの「笑い」やヘーゲルの「歴史の終焉」などに対する仮借ない批判をとおして、「内的体験」における「非知」の思想として洗練されてゆく。そのさいバタイユの思想は、ニーチェの体験との重なりあいをおして、決定的な純化を遂げる。ニ

ーチエは「神の死」において「供儀の執行者の味わうような苦痛」を感じとり、またそこから噴出する「巨大な生命流」としての「世界の破壊的な動き」に「不安」を覚えた。そうしたニーチエの「内的体験」こそ、バタイユの「内的経験」と共鳴した当のものであった。加えて氏は、「内的体験」における「供儀」、「笑い」、「企て」といった諸概念の内実を、ニーチエはもとより、ブランシヨ、モース、ユベール、ホイジンガ、さらには印象派の絵画との関係などから、多面的に炙り出してゆく。読者は本章において、頁を繰るにつれ、おのずとバタイユの「内的体験」を《共に》体験することになるはずである。

第IV章「死」では、入沢康夫の詩をめぐって、吉本隆明に対する若き氏の違和感に始まり、風土の根底に流れる自然の奥深い生へと歩みが進められる。自然の奥深い生から見れば、個体としては死んだ者たちも、また彼らを想う生者たちも、大きな生の流れのなかで繋がっている。近代的な死生観を転倒させながら、酒井氏は、入沢の詩からラフカディオ・ハーン、ネルヴァル、さらにはバタイユの「足の指」へと、軽やかに連想の翼を広げてゆく。「死」と「笑い」の交錯する奥深い生の流れを浮かび上がらせる前半部に対して、後半部では、「死」をめぐるバタイユの思想についての考察が展開される。バタイユにおける「死」は、一般的な個体の絶命を意味する「第一の死」と、生と死が

ともに強く意識され、両義的な危機的状況にある「第二の死」とに分けられる。ヘーゲルならびにコジエーヴへの批判をおして、この「第二の死」を受け止めようとするバタイユのディスクールは、論理的思考や推論に立脚しながらも、表現される端から解体されてゆく運命を引き受ける独自のスタイルとして確立された。「消えゆく光」と呼ばれるバタイユのディスクールの本質に肉迫する、氏の鋭い分析が光る。

第V章「中世」は、バタイユの思想に流れ込んでいる中世文化の諸相を描き出しており、分量からも内容からも、本書で最も読み応えがある。氏によれば、「近代人の精神」を批判的に相対化するため、バタイユは「理性を踏まえながら非理性へ開けてゆく中世人の感性」に依拠した（二四七頁）。氏は、バタイユや現代思想のテキストを参照しながら、中世の「情動」の文化史を明快に読み解いてみせる。「粗野なローマ的言語」としての『聖女ウーラリ哀歌』、レミ・ド・グルモンの『神秘ラテン語』、「騎士道」の「情念」や「道徳」、アンジェラ・ダ・フォリーニョの神秘思想、『サン・スヴェールの黙示録』の凶像、「がらくた詩」と呼ばれる「ファトラジー」、「不敬虔な例外者」ジル・ド・レの処刑、これらが、フォーコーの『言葉と物』、ソシユールの言語論、カンディンスキーの言語観、クロソウスキーの記号論、そしてバタイユ自身のテキスト等をふ

んだんに援用しながら読み解かれてゆくさまは、壮観である。「暗黒時代」といった紋切り型の中世史観、あるいは古典古代の理性の「ルネッサンス」と見る中世史観とも異なり、バタイユにとつての中世は、無名の者たちが直接に集い、剥きだしの笑いや怒りや感動を共に分かち合い、脱的に発露させていた時代だったのである。

こうして本書は、異常な性的表現を好む作家という従来イメージを見事に覆し、きわめて広範かつ緻密な氏の考察によつて、『生の文化史家』という新たなバタイユ像の提示に成功していると言える。しかしながら他方、本書では「文化史」という視点が過去に偏っているため、現代に対する批判的な眼差しは、いささか鈍っているように見える。たとえばナンシーやアガンベンなど、近年バタイユを積極的に参照しているさまざまな現代思想家たちへの目配りも、少なからずあつて然るべきではなかったか。それを描くとしても、たとえば『バタイユ 魅惑する思想』(二〇〇五年、白水社)に比べて、氏の現代批判のトーンはやはりいささか後退しているように感じられる。そのため、果たして現代において剥きだしの生の交流などが一体どのようなにして実現できるのかといった問いが、おのずと頭をもたげてこざるをえない。皮相な笑いが蔓延し、死や共存の意味が見失われ、「犠牲」という名のもとに、わが身を切られるような苦痛を覚えるという「供犠」本来の意味さ

えずぐさま忘却されてしまう時代であればこそ、「非₁知の夜」の所在を指示する批判的思考が求められるのではないか。バタイユの『生の文化史』の重みは、現代への批判的思考においてこそ、真に生かされるのではないか。

だが、門外漢の評者のそのような疑義は、おそらく氏の意図からすれば外れであろう。というのも、氏は随所で繰り返し、バタイユの見出した生の思想を『今』、『ここ』で『共に』生きるよう、切に読者に訴えかけてもいるからである。「非₁知の夜」は、いつでもわれわれのもとにある。

「死に達することなく死に接近して切り開かれる広大で強く脈打つ生の地平」は、いつでもそこかしこに開かれていて、われわれがそれぞれに、しかし『共に』参入するのをいつまでも待っている(二三七頁)。そうした氏の熱い想いは、本書の表紙にも現れている。そこに掲げられているのは、画家館勝生氏が、病との闘いをおして、文字どおり『血をもつて』描いた鬼気迫る作品である。この点に想いを馳せるなら、実のところ、この表紙に包まれた本書の存在それ自体も、われわれを「非₁知の夜」へと誘惑する『生きた物質』であつたことに気づかされる。評者にはそれこそが、本書の奥底に響く、氏の密かなメッセージであるように思われるのである。